
碇シンジ補完計画 子供達に福音を

しん爺くん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碇シンジ補完計画 子供達に福音を

【Nコード】

N0129L

【作者名】

しん爺くん

【あらすじ】

バカシンジ！とおこされる日常。そんな日常に飛び込んで来た非常日常。

ココとは違うもう1つの世界。2つの世界が僅かに重なる時、もう1人の碇シンジが来訪した。

最も近く最も遠い2人の少年が繰りなす物語。

1話（前書き）

本作について。

基本、進行する世界観は俗に言う「学園エヴァ」になります。

「碇シンジ育成計画」とは別ですので、作者自身の独自解釈・設定が展開されます。苦手な方はご注意下さい。

本作に出る事になる「別の世界から来た」方の「別の世界」については、TV版をこねまた独自に展開・完結させた感じになります。ですので、本当に「別の世界」と思ってくれて良い感じですよ。原作ですら無い世界からきやがったな！くらいでお願いします。

むしろエヴァを知らない方が良いのかな？と思う感じになるかとも思いますので、点を考慮の上、お付き合いいただけると嬉しいですよ。

1話

「バカシンジ！」

まどろみの闇を切り裂く天使の声に意識がぼんやりと覚醒する。
かすかに開いた目に映る光は一日の始まりを教えてくれる。

「ようやくお目覚めね、バカシンジ」

ソコには10年を超える年月を共に過ごし、変わる事無く毎朝起こしにやってくる惣流アスカが居た。

「なんだアスカか」

「何だとは何よ！こうして毎朝遅刻しないように起こしに来てやっ
てる幼なじみに対する、それが感謝の言葉〜!？」

どうやら不用意な事を言ってしまったらしい。アスカの纏う雰囲気
が清々しい朝には相応しくないモノになり始めている。
だが只でさえ鋭いとは言えないシンジが寝ボケているのだ。察する
事など出来よう筈も無い。

「ああ、ありがと。だからもう少し寝かせて」

まずは寝よう。その行為は一層の不利益をもたらす。

「なに甘えてんの！もう・・・さっさと起きなさいよっ!!」

言うやアスカは掛け布団を剥ぎ取る。がしかし、アスカは健康な青
少年の朝のリビドーを目撃する羽目になる。

「エッチ、バカ、ヘンタイ！信じらんないっ」

「仕方ないだろ朝なんだから!!」

碇シンジ14歳。繰り返させる毎日が始まった。

キッチンではシンジの母、ユイがシンジの部屋から聞こえてくる毎度の騒ぎにばやいていた。

「シンジったら。せつかくアスカちゃんが迎えに来てくれるのにしょうの無い子ねえ」

「ああ」

ゲンドウの生返事にユイは飽きれながらも。

「あなたも新聞ばかり読んでないでさっさと支度して下さい」

「ああ」

こちらの会話もあいも変わらずである。

「もう、いい年してシンジと変わらないんだから」

「君の支度はいいのか?」

「ハイいつでも。もう会議に遅れて冬月先生にお小言言われるの私なんですよ」

「君はモテるからな」

「馬鹿言ってるんで、さっさと着替えて下さい」

「ああ、分かってるよ。ユイ」

新聞から顔を覗かそうともしないゲンドウに、ユイはため息を漏らす。

「じゃあ、おばさま!行ってきます」

「・・・行ってきます」

シンジを文字通り叩き起しご満悦のアスカと、文字通り叩き起され意気消沈気味のシンジは揃って玄関を出ていく。

「は〜い、いつてらっしゃい。ほらもうあなた！いつまで読んでるんですか！！」

「ああ、分かってるよユイ」

そろそろユイの我慢も限界が近そうだ。

シンジとアスカは駆けながら話すと云う器用なマネをしながら学校への道を急ぐ。

毎朝の事とは云え、たいしたモノである。

今までずっとソレは二人だけの時間で有ったのだが………最近そこに変化が現れた。

「おっはよ〜！シンちゃん！アスカ！！」

「おはよう！レイ」

「………おはよ………」

クラスメイトに会えて元気に挨拶を返すシンジと、どこか邪魔された感じに面白くない挨拶を返すアスカ。

結構分かりやすい。

現れたのは青い髪に紅い瞳が印象的な少女、綾波レイ。

アスカが美少女ならレイもまた負けず劣らずの美少女であった。

「今日もぎりぎりじゃない。ま〜たシンちゃん寝坊したの？」

「う！そんな事無いよ」

「そんな事あるわよ！！毎朝毎朝起こしてる私の身にもなってよね！アンタのお陰で私までギリギリの毎日じゃ無い！！」

「た！頼んでないだろお！別にいい」

「なんですつてえ！！」

「じゃあじゃあ！明日から私がシンちゃん起こしてあげるよ！やさ・し・く。ね？」

「れ！レイ！あんた何勝手な事言ってるのよ！！」

「アスカには関係無いじゃ無い！！」

毎朝毎朝騒がしくも賑やかである。

「もう！やめてよ二人とも。朝から」

「ふふふふ。人の耳目を浴びる事を憚らない・・・恥知らずってことさ」

「カヲル君！」

「やあ。おはようシンジ君。僕は君に逢う為に朝起きた気がするよ」

「何言ってるか分からないよ」

「好きってこ！」バキィィィ！！と赤と青の閃光がカヲルを吹き飛ばした。

「朝から湧いて出てくんじゃないわよナルシーホモがあ！」

「貴方みたいな親戚は居なかった事にするから安心して死んでね」

「カ！カヲルく〜ん！！」

この銀髪に紅い瞳の美少年は渚カヲル。綾波レイの従兄弟であり、シンジのクラスメートだ。

女生徒に多大な人気を誇るも、碇シンジを運命の人と言って憚らない変わった趣味の持ち主である。

「朝から元気ええのお」

「ほんと！いや〜んな感じ」

「トウジ！ケンスケ！おはよう」

また二人、そこに加わる。

鈴原トウジと相田ケンスケ。小学校からの同級生。

「みんな〜！早くしないと遅刻するわよ〜！！」

すこし離れた場所から、クラスの委員長である洞木ヒカリが声を張る。

「おっはよ〜！ヒカリーー！！」

「さ！皆！行こうよ！！」

シンジが駆け出しみんなを振り返る。

そこには笑顔が満ちていた。

「こら！自分だけ勝手に走りだすんじゃ無いわよ！！」

アスカは文句を言いながらも笑顔で後を追う。

「うん！シンちゃん！！」

レイは眩しい笑顔を見せながらシンジに続く。

「あまり朝から走りたくは無いんだけどねえ」

ボヤキながらもカヲルはもうシンジの横を走っている。

「なんや！お前らまたんかい！！」

トウジは慌てて追いかける。

「わわわ！ちよちよちよ！まってよ〜」

ケンスケはカメラを落としそうになりながらも走りだす。

「ふふふ。ほら、急がないと遅れるわよー」

ヒカリは皆が走り出したのを見て微笑みながら声を上げる。

やわらかな朝の光と香りの中で、子供達の顔は笑顔に満ちていた。

眩しいほどに……………

ドオオオオオオオン……………

「……………う……………う……………！！！！」

薄っすらと

「……………夢？痛っ！！」

左肩に受けた痛みが現実に呼び戻す。

「くそっ！何やってんだ！！僕は！！」

シンジはすぐに起き上がり、再び銃を握りネルフを駆け出した。

そこには地獄が在った。

最後の使徒を倒し人類を救ったネルフは人類最後の脅威とされた。突然の戦略自衛隊の侵攻に、訳も分からず防衛戦を展開。だが結果は見えていた。

投降も降伏も許されない。命請いも許されず無情に繰り広げられる殺戮の中を・・・碇シンジは駆け抜けていた。

何処かから銃弾が襲いシンジの脇腹を貫通する。

「ぐううう！！！！アスカは・・・それでも戦ったああ！！！！」
痛みを耐えてシンジは反撃する。

ガガガガガガガ！！！！

脳裏に浮かぶのは惣流・アスカ・ラングレーの最後。

使徒の精神攻撃に侵され生きる気力を失い、死の間際に残した言葉・

・

・・・シンジ ごめんね・・・

背後で起きた爆風により、シンジの背中に無数の金属片が突き刺さる。

「ぬああ！！！！ぐっ・・・綾波は・・・それでも逃げなかった！！！！

！！！！」

腹の痛みと背中の中の痛みを相殺する。

「うおおおおお！！！！」

炎を突っ切りながら綾波レイの最後を想う。

使徒を自分のATフィールドで押さえこみ、使徒もろともに自爆する直前、刹那に繋いだ通信・・・

・・・涙？・・・碇くん・・・私・・・泣いてる？・・・

火炎放射器の炎に左腕が焼かれる。

「ああああ！！！！がああ！！！！カヲル君はあ！もつと辛かった！！！！」

右手で握った手榴弾のピンを啜え外し、敵に投擲する。

ドドーーーーン！！

炎に浮かび上がるのは渚カヲルとの最後の邂逅・・・

・・・ありがとう。君に会えて・・・本当に嬉しかったよ・・・

出会い頭に出会った敵にナイフで切りつけらる。右頬から額に掛けて痛みが走り右目の視界が消えて失せる。

「ぐううう！！・・・悪く思わないで下さいねえ」

シンジは構わず間合いを詰め、敵の顎を拳銃で押し上げる。

バン！

兵士の返り血を浴びながら、姉の様に慕った葛城ミサトの叱責を思
い出す……

…… アンタ生きてんでしょ！ だったら精一杯生きて！ それから
死になさい！！ ……

小型貨物用のエレベーターの中で吐血する。何発喰らったか分から
ない銃弾のどれかが内臓でも傷つけたか。

「ごふっ！ …… それでも僕は…… 守ったよ。父さん」

基地の外までのカウントを眺めながら、父の最期に想いを馳せる……

…… それでも…… それでも私は。私とユイは…… 人類を救
いたかった。すまなかったな…… シンジ ……

そしてシンジが基地の外に辿り着いて見た光景は…… 絶望だった。

「は…… はは…… あははははは！！！」

シンジの左目だけになった視界を覆い尽くすのは、一面に展開する
戦自の部隊だった。

「そうさ…… これが現実なんだ！ どんなに都合の良い夢を見たっ
て！ これが僕の現実なんだ！！！」

ゆっくり歩き始めるシンジに部隊は一斉に攻撃態勢をとる。

「みんな…… 僕は生きたよ？ 精一杯…… 足掻いて、もがいて……
精一杯…… だから！！！」

銃を持つ右手に力を込める。銃一丁を携えたシンジの顔には笑みが

浮かぶ。

そして高らかに……………

吼えた

「さあ！！！始めようかあああ！！！！！！」

駆け出すシンジを号令に、爆音と爆光、爆炎と硝煙が辺りを覆い尽くし……戦略自衛隊によるネルフ壊滅作戦はその全ての作戦行動を完了した。

「あら？」

昼下がり、惣流キョウコはスーパーからの買い物帰りに小さな公園の隅に何かを見る。

ほんの僅かに視界に入っただけの光景になぜか意識が引かれる。

「??？何かしら?…え！人!？」

キョウコが駆け寄るとソコには血まみれの人が倒れていた。

「ちょー！！しつかりして下さい！！一体何が！！！」

手に下げている袋を投げ捨て駆け寄ったキョウコは、その人物を抱き起して驚愕する。

ソレは血だらけの少年だった。

制服と思われるワイシャツは血で黒ずんで固まっている。

何処から出血しているのか見当も付かないほど、抱き抱えている自

分の両手は瞬く間に血に染まる。

幼さの残る顔は頬より大きく切り裂かれ、右の瞼を通り額にまで届いている。

左腕は炭の様に黒く焼けただれている。

自分の腕に僅かに伝わる温もりが無ければ、とてもこの少年が生きているなんて想像も付かないだろう。

そしてまた・・・この少年が死んでしまっていたなら、自分がどうなってしまうかも想像が付かない。

彼女はその少年を知っていた。知りすぎていた。

もしかしたら、そう遠くない未来に自分の義息子になるかも知れない少年。

生まれた時からの成長を間近で見続け、愛娘と共に自分にいつも笑顔を向けて居てくれた少年。

「どうして！どうしてこんな事に！！！」

キョウコは必死で抱きしめ叫んでいた。

流れる涙は悲しいからなのか、恐ろしいからなのか・・・口惜しいからなのか。

震える叫びに周囲の人が気付き、少年が救急車で運び込まれるまで彼女は少年を呼び続けた。

「シンジ君！！！！！」

それは弁当を食べ終わった頃に訪れた。気の合ういつもの面々で昼食を済ませ、これからの僅かな時間を思い自由に遊ぼうとした矢先だった。

ヴーヴーヴー

「あれ？アスカあ。携帯なってるよお」

「え？あら？ママから」

レイに言われて携帯を取り出すアスカは着信を見てそう漏らす。キヨウコが学校に居る時間に電話を寄こすなど滅多に無い事であった。

「何かしら？ pi もしもし？ママ？？」

『

「????あれ？ママ？」

携帯電話の向こうからは沈黙しか流れてこない。僅かな息遣いが聞こえてくるので、そこにキヨウコが居るのは間違い無い筈なのだが。

「もしもしママ？ねえ！ママ！いったいどうしたの??ママ!!」

『 アスカ』

「ママ？ねえ！どうしたの！何かあったのママ!!」

アスカは自分が聞いた事も無いキヨウコの弱々しい声に、嫌な感じをぬぐえない。

アスカの不穏な空気に周囲の友達も何かを感じ、次第にアスカの元へ集まってくる。

「ねえ！ママ！いったいどうしたのよ!!」

『アスカ・・・落ち着いて・・・聞きなさい』

『え？・・・うん』

受話器の向こうのアスカが聞く態勢だったのを感じる。

まだアスカに伝えるべきでは無いのかも知れない。そうも思う。だが、もしかしたらもう二度と・・・そう思うと伝えずにはいれなかった。

万が一の場合でも一瞬でも意識を取り戻すかも知れない。その時に傍に居る事が出来れば最後の言葉を交わす事も出来るかも知れない。もちろん。そんな事は無いと信じている。彼は必ず助かると。

今も手術室の中で彼は懸命に闘っている筈だ。ドアの外では彼の両親が必死に祈りを捧げてる。

親友でもある母のユイは、自分の血を全て抜いてもいいから息子を助けてと医師に縋りついた。

妻を支えた夫のゲンドウはただ手術室を睨み続けていた。それは怒りだろう。でも何にだろうか？

もちろん、少年に傷を負わせた存在に対する憤怒の情は計り知れないだろう。でも、それは何も出来ずにいる自分に対しても向けられているように思った。

私の娘はどちらだろうか？

悲しみか。怒りか。

でも、伝えなければいけない。そして、娘を支えるのは自分・・・母である自分の務め。

キョウコは決意し口を開く。

「たぶん・・・そろそろ学校にも連絡が行ってる頃だから、貴女は今すぐこっちに来なさい」

『え？ちょ！何言ってるの？ママ。大体こっちって何処よ？ママ一体何処に居るの？』

心底分らない。そういつた声が返ってくる。当然ではあった。

「市立第二病院よ」

「え？びよ！病院つて！ママどつか怪我したの！！待ってて！すぐに行くから！！」

「違うわアスカ。私はどこも怪我なんかしてない。私は大丈夫・・・そう・・・大丈夫だから」

「え？ママじゃ無いって・・・ママ？一体何が言いたいのよ。おかしいわよ？さつきから」

「いいから・・・落ち着いて聞いて・・・それからこちらに来なさい。決して取り乱しては駄目よ」

「ママ？」

「・・・怪我をしたのはね？・・・今・・・緊急手術を受けているのは・・・ね」

「うん」

「シンジ君なの」

「・・・はあ？」

受話器の向こうからはアスカのとぼけた声が聞こえて来た。無理も無いと思う。自分だってこの目で見たのに一瞬信じられなかったのだから。

「貴女が信じられないのも分かるわアスカ。でも今は一刻を争うの。とにかく貴女は」

「いや・・・ママ？もう、やめてよね？そんなつまらない・・・もお、一瞬何事かと思っちゃったじゃ無い」

「アスカ、私も冗談だと思いたいわ。きつと何かの冗談だつて。でもアス・・・今は取り敢えずコツチに来て。貴女も帰りを待ってるって・・・シンジ君に伝えてあげて」

『あのね、ママ?』

「ごめんねアスカ。ママは貴女に何もしてあげられない……ごめんね」

『はあ』

いいから

私だって分ないわよ

』

「ぐすつ……アスカ? ねえ……聞いているの? アスカ?」

キヨウコは急に聞こえなくなったアスカの声に不安を覚える。もしやその場で卒倒したのかも知れない。アスカとシンジの関係を思えば、それくらいは十分にあり得る話である。

「アスカ? アスカ! 返事してアスカ!」

だが、キヨウコの耳に届いた声は、彼女の想像を超えたモノだった。

『あの……キヨウコおばさん?』

「……え? ……アナタ……は?」

『はあ。シンジですけど。僕がどうかし』「ちよつと貸して! ね?」
分かったでしょママ! 大体、シンジだって一緒に学校に来てるのに、そんな冗談通じる訳ないでしょお? もう! ホントにどうしちゃったのよママ! ……あれ? ママ? ちよつと聞いているのママ!』

キヨウコの耳には何も届いては居なかった。ただ呆然を携帯を握りしめ視線を飛ばす。

手術中と光る文字と、ベンチに腰掛ける2人の男女に。

「ママあ? もしも……し」

「どうしたの? おばさん」

「さあ? なんか無言になっちゃた。シンジ、あんたなんか心当りあ

る？」

「え、？有る訳ないだろ！そんなモノ」

「よね〜。どうしたのかしら？」

シンジとアスカだけでは無い。その場に居た、レイ、カヲル、トウジ、ケンスケ、ヒカリも皆一様に？を浮かべる。そして其処にミサトが駆け込んでくる。

「大変よ皆！！すぐに準備して！！シンちゃんが大怪我して病院に……って、シンちゃん？」

皆の頭のさらに？が追加された。

「一体、彼は……」

誰が言ったか分からないその言葉は、そのまま全員の言葉であった。キョウコからの電話の後、シンジとアスカは一足先に、追って授業が終わる次第レイ達も病院に駆けつけていた。

ソコには手術を終え運び込まれた集中治療室で横たわる、一命を取り留めた……もう一人の碇シンジが居た。

それは奇妙な光景だった。

様々な機械に取り囲まれ眠るシンジを見詰めるシンジ。

双子どころでは無い。まるで鏡合わせの様に同じ二人。でも違う。

一人は朝から共に居た友人。もう一人は傷だらけの瀕死の友人と同じ顔をした……誰か。

一時、シンジが病院に辿り着いた時にはかなりの混乱を引き起こした。誰も一様に事態は把握できなかった。ただ自分達の知るシンジ

は無事だと云う事以外、確かなモノは何もない。

今、子供達とミサトはガラス越しに眠る彼を見るだけである。そしてゲンドウとユイ、キョウコは別室で彼の容体を聞いていた。

彼は息子では無いと分かったものの、身元がはっきりしていないという事態になっている。第一発見者としてキョウコは立会、ゲンドウ達もそれに付き添う形をとる。

実際、いざとなった時にはゲンドウの存在は色々と便宜を図り易いのである。

そして、3人に向かい合うのは赤木ナオコ。

彼女は神の手とも言われる名医であり、本来は多忙を極めるのだがシンジが重傷と聞き、文字通り飛んで来たのだった。

もし彼女の手術を受ける事が出来なければ、間違いなく彼の命は無かっただろう。

その彼女も、何とか手術を成功させ手術室を出て、ユイに抱きつかれているシンジを見た時には数瞬動けなかった。自分が手術した人間と同じ人間が目の前に居たのだから無理も無い。

「ふう・・・ホント。なにが何やら、ね」

疲れたように呟くナオコは煙草に火を付ける。

ユイ・キョウコ・ナオコの3人は大学の同期生だ。三賢者などと呼ばれるほどの優秀な3人で有り、ともに掛け替えのない友人で有った。

「で？ナオコ。あの子は一体・・・」

「ふう・・・結論から言うわね。彼はシンジ君よ」

「そんな」

ナオコは言い放った。迷い無く言い切る彼女の言葉に、一同に緊張が走る。

「でもそれが私達の知るシンジ君か？と云うとそれは別ね」

「良く分からないわね」

「コレよ」

ナオコが一同の前に見せた書類は何かのグラフや数値がびっしり書き込まれていた。

ソレを見たユイとキョウコは固まる。

「そんな」「こんな事って」

二人を前にナオコは煙草を消し、静かに語り出す。

「DNA鑑定の結果よ。彼がユイとゲンドウさんの子供で有る確率は99%。そして碇シンジ君とのDNA比較……100%」

「在りえないわ!!」

「事実よ」

「でもこんな……これじゃあまるでドッペルゲンガーじゃない！」

「案外そうかもね。DNAだけじゃない。指紋、網膜、足の大きさまでびつたり一緒。まるで生き写しね。同位体といっても過言では無いわ」

室内には静寂が訪れる。人としての感情論と科学者、医師、研究者としての理性がせめぎ合う。

「ではナオコは彼がシンジ君本人だというの？」

「いえ。少なくとも私達の知るシンジ君では無いわね」

「それは？」

「ココ」

言って一枚の写真を指さす。ソコには少年の手のひらと思われる写真があった。

「ココの傷、火傷ね。でもコレは最近のモノじゃ無い。少なくとも数か月前に出来たモノね。私の知る限り、シンジ君が手に大火傷したなんて事件は無かったと思うけど？」

「有る訳ないでしょ!!!」

「そう。だから彼はその時に居たシンジ君では在り得ない」

結局また袋小路に戻る。そんな空気の中、終始沈黙を通っていたゲンドウが口を開く。

「うむ。彼の正体は取り敢えずいい。ナオコ君、それで彼の容体は？」

ゲンドウの言葉に、ユイとキョウコは改めてナオコに向かい合い、ナオコは小さく息を吐いて椅子を立った。

そのまま窓に向かい、背を向けたまま語り出す。彼の容体を。

「容体・・・ね・・・そうね。彼が生きているのは奇跡でしょうね。自分でも感心するわ。よくも諦めなかったものね」

「そんなに」「でも助かったんでしょ？」

「命はね。まだ予断は許せないけど、しばらくは私もこの病院に詰めるから余程の事が無ければ大丈夫でしょう・・・でもどうにもならない事もあるわ」

「それは？」

恐る恐る聞くも、聞いた事を後悔する事になる。

「全部で6発。彼の体から抽出された銃弾の数よ。22口径からマ

シンガンまで。よくもまあ撃ちも撃つたりって感じね。貫通している傷もいれたら10はいくんじゃないかしら」

「なんて・・・こと」「そんな・・・」

蒼白になる二人に、さらに言葉は襲い掛かる

「頬から走った傷は右の眼球を切り裂いてる。視神経諸共ね。彼の右目はもう死んでいる。」

背中には無数の破片がめり込んでるわ。傷から察するに、何かの爆風で飛来した金属片が突き刺さったのね。神経に絡みついているモノも少なくないから、全部を取り除く事は出来なかつたわ。

左腕は二の腕から指の先まで重度の火傷。おそらく一瞬に凄まじい高温で焼かれたのね。まるで火炎放射器にでも焼かれたみたい。体中の銃創は彼の内臓を酷く傷付けた。致命傷になつてないのは奇跡ね。しかも」

振り返るとソコには、顔色を失くしたユイとキョウコが居る。一度間を取るうかと思うナオコに、ゲンドウは言う

「しかも・・・なにかね？」

「・・・硝煙反応。彼の体中に在る硝煙反応は様々な事を教えてくれるわ。どうやって撃たれたのか。どれほどの距離で撃たれたのか。そして・・・彼に付着していた多量の血痕からは5人や10人では済まない人間の血が検出された」

「ナオコ？」

「彼の体中から検出された反応を見るに、彼は明らかに銃を撃っている。それもおびただしい数をね。そして血・・・」

「それって」「嘘・・・それじゃあ」

「そうよ・・・彼は襲われて傷を負わされたんじゃない・・・
・・・彼は戦った結果傷を負ったのよ」

室内を沈黙が満たした。

少年の手術から、すでに30日が経っていた。

危険な状態を逸し、特別病棟の一室へと移された少年は、それでも意識を取り戻す事無く眠り続けていた。

毎日、ユイやキョウコ、シンジ達が見舞いに訪れているが、ただ眠るシンジと同じ顔の少年を見まもるだけだった。

今日もまた、シンジ達は学校が終わった後、病院へ訪れていた。

「ただいま。母さん。どう？彼の様子は」

「あらシンジ。お帰りなさい。変わらずよ・・・ずっと眠り続けているわ」

今日はユイが病室に居た。シンジ、アスカ、レイ、カヲル、トウジ、ケンスケ、ヒカリ。

シンジ達7人は、ほとんど毎日病室に来ていた。

シンジはもちろんだったが、他の者も、シンジと同じ顔をした少年の事が気になっていたのだった。

「ねえ。ホントに目、覚めるんでしょうね」

「僕に聞くなよ」

「それにしても見れば見るほどよう似とるなあ」

「ホント。アスカのママがシンちゃんの間違えたのも仕方ないよね」

「それにしても銃創だからなあ。興味あるよな」

「相田君！不謹慎よ！」

「早く目を覚まして欲しいモノだね」

繰り返される他愛も無い会話。意識こそ取り戻してはいないが、それでも命の危機は去った事が、一同の心に一種の余裕を持たせていた。

そして、そんな和やかな室内に大きな変化が訪れたのは、夕方に差し掛かり、子供達が帰ろうとしていた矢先だった。

「！え？」

気が付いたのは洞木ヒカリだった。

「どうしたの？ヒカリ」

「え？今・・・彼の瞼が動いた気がしたんだけど」

「嘘！！」

ヒカリの言葉に病室内に緊張が走る。皆、一様に少年の寝顔に注意を向けるが・・・

「・・・・・・・・変わらないじゃ無い」

「そ、そうね。ごめんね。私の気のせいね」

気の所為だった。そう結論付けて皆が病室を出ていこうとした時

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・うっ」

「！！」

「う・・・・・・・・・・・・・・・・・・うっ・・・・・・・・・・ん」

ヒカリが目にしたモノは、うっすらと開かれた、少年の左目だった。

「うそ・・・・・・・・ねえ！しっかり！分かる？！私が見える！！」

ヒカリの声に訝しげに振り返った皆の目に、もぞもぞと動く少年と、顔を覗き込んで叫ぶヒカリの姿があった。
ユイも子供達も一様に言葉を失いその姿に注意を注いでいると、シンジと同じ声が、力無く病室に流れた。

その驚愕の言葉と共に。

「うつ・・・あ・・・・・・ほ・・・・・・洞木・・・さん？」

「え！」

室内の全ては動きを止めた。

少年は確かに洞木と言葉を発した。ヒカリの知り合いであり得ない事は、誰よりも驚いている本人を見ていれば容易に想像が付く。まだ意識がはつきりしていないのだろう。眼前の洞木ヒカリ以外にも大勢いるのだが彼がそれに気付いた風は無い。

「・・・こ・・・こは？」

静かに言葉を話す少年にヒカリは頭を切り替える。普段より面倒見がよく責任感が強いヒカリならではのだろう。

「ココは病院よ。貴方は重症を負っていて運び込まれたの」

「病・・・院？」

「そうよ。手術は成功したけど貴方は意識を取り戻さなかった。もう一ヶ月も眠り続けていたのよ」

「・・・そうか・・・僕は・・・また生き残ったんだね」

少年はどこか諦めた様に、そしてひどく疲れた様に呟いた。

「ねえ、貴方はいった「夢を見たんだ」い！・・・夢？」

「うん……あの戦いの中で一瞬意識を失った時に……夢を見たんだ」

ヒカリの言葉を遮って少年は静かに語り出した。ヒカリは、そしてユイヤ子供達は黙って聞かざるを得なかった。

「僕が朝寝てるとね……アスカが僕を起こしてくれるんだ」
聞いていたアスカが息をのむ。ヒカリだけじゃない、自分の名前も知っている見知らぬ少年に恐怖を覚える。
ヒカリは一瞬だけアスカに視線を向けるが、すぐに少年に注意を戻す。

「あのアスカがだよ？それにね、アスカは僕の幼馴染だって……
……可笑しいよね？そんなの……でも……アスカ、元気に笑ってた。

本当に元気に。僕らが出会った頃のアスカみたいに、綺麗な笑顔で生き生きと……洞木さん、アスカは笑ってたよ」

「そ……そう」
アスカがシンジの幼馴染なのは誰もが知っている。だが、なぜ彼が知っているのか。

そして続いたのは、さらなる驚きをもたらせる。

「朝、起きてリビングに行くよね？父さんと母さんが居るんだ。僕に、おはようって言うてくれるんだ……こんなに嬉しい事は無い。学校に向かってアスカと二人で駆けていると綾波が来た。洞木さん……綾波は笑ってたよ。

楽しそうに笑ってたんだ。僕の事シンちゃんだって……はは……洞木さんにも見せたかったなあ……
ねえ洞木さん。綾波の笑顔はね、すごく可愛かった。夢でもいい……僕はもう一度、綾波の笑顔が見たいよ。

アスカと綾波が僕を挟んでワイワイ騒いで、そこにカヲル君が。そっか、洞木さんは知らないよね？

今は居ない・・・大切な人が其処には居たんだ。カヲル君はカッコいいんだよ？

僕とカヲル君はあんな形でしか出会えなかった・・・夢なのに・・・夢なのに・・・夢でしか無いのに・・・悔しい。

僕は・・・僕だって、彼と共に生きたかった。

トウジはね。元気だったよ。そう・・・元気だった。そして僕に笑ってくれた。

都合好いよね、僕は・・・ホントに、自分勝手な夢なんだ。

ケンスケはやっぱりカメラが好きで。またアスカの写真でも売って怒られてるのかなあ。

また同じ夢が見れたら僕も売って貰おう。アスカや綾波の。みんなの写真を・・・そして洞木さんに見せてあげるよ。

ほら、皆、こんなに笑ってるんだよ？って・・・こんなに・・・幸・・・せ、なんだよって」

全ての者が息を飲んでいた。

彼が話していたのは自分達の事だ。それも日常。

自分達がいつも繰り返し返している何気ない日常。ソレを彼が夢に見た、らしい事は分かる。不思議な事に違いは無いが、驚く事は他にある。彼が自分達の事を知っている事。そして自分達の日常が、彼にとって異質なものであるらしい事。

「・・・あなた・・・え！」

ヒカリが目にしたモノは、左目から零れる・・・血の涙だった。

「・・・夢の中みんなは幸せで・・・それでも僕の、僕らの現実は何も変わらない・・・変わってなんてくれない。」

失って、失って・・・何一つ残ってはくれない。僕は、それでも僕は、ただ守りたかっただけなんだ。
どうして・・・僕らは・・・助けて。だれか、助・・・けて・・・よ

再び寝息を立てだした少年の赤い線を、皆はただ見つめる事しか出来なかった。

「・・・う・・・うん？ココは・・・そうか・・・僕は病院に」

「気が付いたようね」

「え！」

ソレは聞きなれた声だった。そして、決して二度と聞けない筈の声だった。

どうして？その言葉が出るより先に、少年は彼女の名前を呼んだ。

「み・・・ミサト・・・さん？」

病室にはミサトが一人、立っていた。

一度は目覚めたのだ。近いうちにまた目が覚めるだろう。

その予測の下、彼が洞木ヒカリに話した事を大人達は検討し、一つの仮説に行きついていた。

それはあまりに荒唐無稽で、非現実的な回答だったが、同時に最も正解に近いと思われるモノだ。

この少年はココとは違う世界から来た、もう一人の碇シンジである。

と。

いわゆるパラレルワールドでありSFな話でしかない。だが全ての要因を纏めて一つの理論体系を成そうとするのであれば、実際それしか手は無いと思われた。

そして、その予測を裏付ける為に必要不可欠な作業がある。本人との答え合わせ。そしてその役を、葛城ミサトが買って出たのだった。ユイやキョウコでは感情的になってしまうかも知れない、子供達には荷が重いだらう。

その点、ミサトは教師として一時の感情に流されない自信が在ったし信頼もある。答え合わせに十分な回答も持ち合わせている。

ドアの外には関係者のほぼ全員が控えていたし、予定として皆、部屋には入ってくる事になっている。

実際に目にした方が分かりが早いだろう、と云うのもあつたが、ユイやキョウコが強硬に同席を主張した事も理由の一つではあつた。だが、最初にこの部屋に居、少年の目覚めに立ち会うのは、ミサト一人の役目だつた。

「そう。私の事も分かるのね」

彼の傍には自分も居たのだと認識する。

「あたりまえじゃ無いですか。でも、てっきりあの爆発で死んじやつたと思つてました………だけど生きてたんですね。良かったです……本当に」

その言葉に少なからずショックを受ける。自分が死んだと思われる程の状況など、そうそうにある物では無い。

だがミサトはひるまず彼を見据える。有る程度は予想の範疇だ。そして自分達の答えが真理に近づいたと感じる。

「そう……私は葛城ミサト……ねえ。自分の名前、分かる？」

一つ目の確信。

「え？もちろんですよ。嫌だなあ。僕は碓シンジですよ。記憶喪失になんてなってますんよ」

そして少年は、碓シンジと名乗った。

「そう・・・貴方は私を知っているのね。でもね？碓シンジ君・・・
・・・私は貴方を知らないの」

「・・・え？」

「焦らないで。ゆっくりでいいから、私の言葉を受け入れて」

「ミ、ミサトさん・・・何言ってるんですか？そんな僕の事」

「第三東京市立第壱中学校教諭、葛城ミサト。それが私。どう？貴方の知る私は？」

「ミサトさん？何言ってるんですか？教諭って先生って事？いったいどうしちゃ」

「教えてちょうだい、碓シンジ君。貴女の知る葛城ミサトは？」

「！・・・特務機関ネルフ、戦術作戦部作戦局第一課。葛城ミサト
三佐」

それは聞いた事のない言葉の羅列。だがそれは、ミサト達の予想の全てを確信へと変えさせた。

「あ・・・ミサ」

「落ち着いて聞いてちょうだい、碓シンジ君」

「え？・・・はい」

シンジが聞く体制になった事を確認してから、ミサトはゆっくり話し始める。

「まず一つ。これはとても信じられない事だろうけど、どうやら事実の様な。だから貴方にも受け入れて欲しい。とても難しいけど・

「受け入れなさい」

「あの、いったい何を？」

「ココはね……今貴方の居るこの世界はね……貴方の居た世界では無いの」

「……は？」

沈黙の後に聞こえるのはとぼけた声。無理も無い。

「多分、なんだけどね。私達にもよく理解は出来ていないんだけど、貴方の話や、今の状況から推察すると、その答えが一番しっくりくるのよ。」

ほら！SFとかに良くあるでしょ？パラレルワールドってやつ。違う世界にも自分達が居て、少し違った生活をしてる。貴方はそんな世界から、私達の世界に来てしまったんだと思う」

「……」

何も言わないシンジにミサトは言葉を続ける。

「もちろん確証はないわよ？私達の世界にはそんな技術も記録も無い。貴方が居た世界ではソレが普通に行われていた事なのか、それともイレギュラーなことなのか。それは私達にも分からないのだけど……ここまで。理解出来た？」

ミサトは少しづつ話を進めていくつもりだった。お互いに理解し合いながら。

「……どうして……そう思っただんですか？」

「え？……うん。そうね。まず第一にこの世界にも君が、碇シンジ君が居たからよ。彼は私の生徒で、今は中学2年生。貴方は？」

「……僕も14歳です」

「そう……とにかく、彼と貴方はDNAから指紋、網膜パターン、身体特徴までが完全に一致していた。同位体と云う程に。それは有り得ない事だっただけ事は分かるわね」

「……（こくん）」

「そして貴方の話」
「話？僕の？？」

シンジは訝しげにミサトを見た。

「そう。貴方こないだ意識を取り戻したの覚えてる？」

「……！ああ。なんとなく……そうだ、目が覚めたら……
洞木さんが居た」

「そうね。洞木さん！入ってきて！」

ミサトの声に、一人、病室へ入ってくる者が居る。洞木ヒカリだ。

「あつ。洞木さん」

「え、えつと……」

戸惑いを見せるヒカリに、ミサトが割って入る。

「碇シンジ君。確かに彼女は洞木ヒカリさんよ。でも彼女も私と同じなの。洞木さんは貴方を知らない」

「え……そんな」

「……ごめんなさい」

うなだれる2人に、ミサトは静かに話を続ける。

「続けるわね。その貴方が意識を取り戻した時、洞木さんに貴方が話した事、覚えてる？」

「話？……そう……だ。夢……見た夢の話を」

「そう、夢の話。貴方が見た夢の……でもね？碇シンジ君……
……ココではその夢は現実なのよ」

「そんな！それじゃ！」

「そうよ。入ってきて！」

そして一人ずつ病室に入ってくる。

ミサトはシンジに注意を払いながら、一人ずつ紹介を重ねていく。

「まず、彼がこの世界の碇シンジ君よ。この世界のもう一人の貴方ね。貴方達が触れ合ったら何か危険な現象でも起こるんじゃないかとも思っただけど、偶然彼が貴方に触れてね。特に何も起こらなかつたわ」

病室で、二人のシンジが無言で見つめ合っていた。

「彼女は惣流アスカ。こちらのシンジ君の幼馴染ね。貴方が夢に見たように、彼女は毎朝シンジ君を起こしてるのよ？まあ、世話焼き女房ってところかしら」

「ちょ！ミサト！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ミサトが軽く空気を和ませるが、ベットの上のシンジは無言で見つめていた。

「そして彼女は綾波レイ。この春にウチに転校してきたのよ」

「よろしく！」

元気に挨拶をする綾波レイに、彼の表情は一瞬驚きを見せる。

そうして紹介は続いていく。

「鈴原トウジ君に相田ケンスケ君。彼等はシンジ君とは小学校からの同級生。渚カヲル君は最近こっちに来た子で、綾波さんの従兄妹なの。」

そして大人。彼女は惣流キョウコさん、貴方を発見して病院に連れて来たのは彼女。アスカのお母さんでもあるわ。

そして赤木ナオコ先生。貴方の手術を担当して助けてくれた優秀な医師よ。そして」

コレが最後の2人である。

「あの方が、碇ゲンドウさん。この世界のシンジ君のお父さん。その隣が碇ユイさん・・・お母さんよ」

「……………すみませんでした……………」

視線を戻した彼の眼は、暗く濁って見えた。

「……………どう？ココに居る私達と貴方の中の私達。違いはある？」

それは確認に過ぎない。皆思っているのだ。おそらく全てが異なっている。

「……………違う事だらけです……………なにもかも。僕が会った事が無い人も居ます。いや……………覚えていないだけか」

「そう……………それは誰かしら？」

軽い受け答えのつもり。でもそれは衝撃。

「赤木ナオコさんと惣流キョウコさん。それに……………碓ユイさん」

!!!!!!!!!!!!!!

それは衝撃だった。

「そんな！貴方は確かにゲンドウさんとユイの子供なのよ！それはDNA鑑定でも明らかだわ！」

叫ぶキョウコに彼が返した言葉は、簡潔だった。

「僕は……………父さんと母さんに捨てられましたから」

その言葉は皆に衝撃を、なによりユイに衝撃を与えた。

自分とは違う人間とは云え、碓ユイが碓シンジを捨てた。それは信じたくない事だった。

隣に居るゲンドウの袖を強く握る。この場に誰も居なければ卒倒していたかも知れない。

そんな一同の前にゲンドウが一步でる。

「……お前の世界の事を……お前の事を、我々に話してくれないか？」

「……………」

少年の目は死んでいるといっても良い。

「聞かせてくれ。一体なにがあつたのか」

しばしの沈黙のあと、彼は言った。

「話すのは構いません……でも全てを話したら、一つお願いを聞いて貰えますか？」

「願いととはなんだ」

「それは話し終えてからで。大丈夫。簡単な事ですから……どうですか？」

「……………いいだろう」

ここに契約はなつた。そして語り始めた……………もう一人の、碇シンジの物語を

「さあ……………どこから話しましょうか……………」

1話終わり

1話（後書き）

2作目もフィンフィクションになってしまいました。

毎週更新という訳にはいかないと思いますが、また進めさせていた
だころと思っています。

ちなみにそれほど長い連載予定では有りません。

前回書いた際に、前編！と書き出してしまい3部構成のキチキチに
なってしまうましたから、反省を含めて1話としました。予定では
6か7話位で完結になります。

それでは、また。

2話

少年はベットに横たわったまま、静かに語り始めた。たったひとつの、自分の物語を。

「そうですね……一つ聞きたいんですけど」「なにかね？」

聞き返すゲンドウに帰った来た質問は意外なモノだった。

「この世界の南極って、どうなってます？」

意外すぎる質問だった。

「無論、氷で埋め尽くされた極寒の場所だが？」

「そうか……じゃあ、そこから始めましょう」

聞く者達は何を言っているのかわからなかった。彼の言葉を聞くまでは。

「僕の世界の南極は氷なんてない。それどころかバクテリアさえ生きる事が叶わない死の領域でした」

「！馬鹿な！」

「信じる信じ無いは貴方達の自由です。全ては15年前に起こったセカンドインパクトの所為です」

「セカンドインパクト？」

ソレは聞いた事の無い言葉。

「はい。南極大陸で発見された正体不明の物体。いや、生命体です

ね。それが引き起こした大爆発によって、南極大陸の氷は一瞬で蒸発しました。

津波や洪水が世界を襲い、多くの都市が海へ呑まれた。爆発は地球の地軸をも歪めてしまいました。世界の気候は激変し、日本は常夏の国になり、世界中で多くの種が絶滅を迎えました。

溢れ出る難民。引き起こされた戦争・・・僕達の世界は、その人口の半数を失いました」

皆、言葉を発する事が出来なかった。

それはまるで映画の様な言葉の羅列。それを過去として語る少年。現実感が失われていくのを感じていた。

「セカンドインパクトの後、謎の預言書が発見されました。

エノク文字とも微妙に違う文字で書かれたその預言書の解読に、世界中の学者が凌ぎを削ったそうです。そしてある日、日本の学生がその解読に成功しました。解読した人物は・・・碇ユイ。僕の母でした」

自分の名前が出て来た事で、ユイは身を乗り出し聞き入った。

「・・・解読した書は裏死海文書と呼ばれました。そして其処に記されていた事は驚愕の預言でした。

そこには多くの預言が記されていて、その全てが正確でした。そしてソコには、セカンドインパクトも預言されていました。

それによって判明した事は、セカンドインパクトを引き起こしたのは使徒と記されている生命体である事。

僕達はそれを第一の使徒、アダムと呼んでいました。予言には、【人類が使徒を見つけその怒りにふれる】とありました。【多くの地が海に呑まれ、民の半数を失う】と・・・ソレを読んだ者達は恐慌状態に陥ったそうです。

なぜなら予言はまだ続いていたのだから」

ソレを聞いてユイは声を上げる

「セカンドインパクトは終わってはいなかったって事なの？」

「いいえ。セカンドインパクトは終わりました。記されていたのは更なる預言……サードインパクトについてでした」

「サ、サード……インパクト……」

「はい。それによると、世界の何処かに居る第二の使徒、僕らはリリスと呼んでいましたが。その第二使徒リリスと、他にも居る使徒が接触する事で、サードインパクトが巻き起こり、世界はその全てが滅ぶとありました」

淡々とした口調で話す少年は、淀みなく事実のみを語る。それが一層の真実を感じさせていく。

「人類は皆、生き残る為に必死でした。まずリリスを探す。」

これは日本の地下深く。大空洞の更に奥に発見された。まるで十字架に貼り付けにされた様に岩肌に縫い付けられていました。

そして次に考えたのは使徒への備えです。

使徒とリリスを接触させてはならない。その為にリリスの眠る大空洞をジオフロントとし、その地上には対使徒用の迎撃都市を建造した。それが僕の居た街……第3新東京市。

そして使徒に対抗すべく、世界中から優秀な頭脳や技術を集め人類の最後の砦となるべく創られた国連直属の特務機関。それがネルフ。

僕の所屬していた組織です」

ソコで我に返る者達が居る。

「待つて！人がそのような組織を創るのは理解できるわ！でも何故貴方の様な子供が」

「それはおいおい・・・続けますよ」

再び聴衆は聞き入る。

「そのネルフの総司令となり、人類を守るために使徒と戦う組織を率いたのは僕の父、碇ゲンドウでした」

ゲンドウは息をのんだ。そして思う。きっと自分がそこに居ても同じだろうと。

「でも人類は使徒に対して余りにも脆弱でした。

あのセカンドインパクトを引き起こす程の怪物に、一体どうすれば勝つ事が出来るのか？ネルフや世界中の研究機関は必死で生き残りを模索しました。そして一つの可能性を、ネルフの頭脳は見出した」

そこまで聞きに回っていたユイは一つのひらめきを見た。

「・・・使徒に勝つ事が出来るのは・・・使徒だけ？」

少年は僅かにユイに視線を送ったが、すぐに元の天井を見つめる。

「そうです。そしてリリスの細胞と人類の科学の力を合わせ、使徒のコピーを造り出した。それが対使徒戦用汎用人型決戦兵器・・・
・・・エヴァンゲリオン」

気のせいでは無い。確かに今、少年の空気に陰りが見えた。

「巨額の資金と人類の英知を結集して造られたエヴァ。その建造は極秘裏に行われました。

ただど様な問題点があつて、試行錯誤を繰り返しながらもなかなか成果は生まれなかった。

一つずつ課題を乗り越えていった後に、最後に残された課題は最も

重要なモノでした。それは・・・エヴァの操縦方法の確立でした」

「操縦？操る方法が無かったって事？」

「ただ動くだけのロボットでは意味がない。使徒と闘い、勝利を収める兵器でなければ。」

時が許せば、いつの日か人類はその技術を手にする事が出来たでしょう。でも預言された使徒の再来は迫っています。我々人類には時間が無かった。

数多の方法が模索される中、エヴァの開発責任者が新たな方法論を生み出しました」

「それは？」

「それは魂。煩雑な機器に頼らず、エヴァとシンクロし自分の手足の様に操って闘うと云うモノです。」

もちろん、その方法も考えた先人は居たのですが、上手く行った例など皆無でした。

そこでその責任者は考えました。

科学の力で生み出されたとは言え、リリスの細胞を使っているエヴァには、おぼろげながらも魂の欠片の様なモノが存在する。シンクロが上手く行かないのは、そのエヴァの使徒としての魂が搭乗者の魂を拒絶するからだ。

だったら、そのエヴァの魂が搭乗者を受け入れる様にすればいいと」

「そんな事が可能なの？」

「そして取られた方法が・・・魂のインストール」

そこでゲンドウを始めとする大人達は気付く。

その計画の残酷性に。

「まさか」

「誰かの魂をエヴァに組み込んだ後で搭乗者が乗る。搭乗者の受け皿として、いわゆる人柱を埋め込もうと・・・でもそう簡単には行きませんでした」

「それはそうでしょう！そんなオカルトじみた事、上手く行く訳ないわよ」

「第一、そんなモノに取り込まれた時点で人の自我なんて保ってられない訳ないじゃ無い」

キョウコとナオコの反論を聞いているのか居ないのか。それでも少年によどみは無い。

「そう・・・自我を保つ事は出来ない。だから本能に訴える事になった。

自我が無くとも魂が残ればそこには本能が残る筈。その本能が搭乗者を受け入れる事が出来ればあるいは、と。

そしてインストールする為の本能には、人として最も強い想いが選ばれた。それが」

「まさか！！」

そこで初めて、少年はユイの目を真正面から見据えた。

「自分の子供を愛する母の愛・・・母性本能が選ばれました」

「そ・・・それじゃあ」

「エヴァンゲリオン初号機の中には・・・碇ユイの魂が入っていました」

ふらつ。とユイはふらつくも、ゲンドウがそれを素早く支えた。

ユイの顔には血の気が無かった。それはきつと誰よりも、この後の少年の話を理解していたから。

「その方法論を確立したのも母でした。そして母は、誰かがやらなければイケない事で有るならば自分が、と。

母は誰よりも判っていたんです。エヴァに取り込まれる事が碇ユイの死と同義であると。そして・・・それは必然的に、自分の子供を人類を守る尖兵として使徒という怪物の待つ戦場に立たせる

事になると言う事を……
誰かが言っていました。碇ユイは人類を守る為に人柱となり、自分の息子を……生贄にささげたと……母は、人類を守る為に僕を捨てた」

違うと言いたかった。

きっと貴方も愛されていたと言って聞かせたかった。

だが、そんな言葉を言い出せないほど、少年から滲み出る空気は、深い悲しみに満ちていた。

「それじゃあ貴方は」

ソレはただの確認。確かめるまでも無い事。

「……汎用人型決戦兵器エヴァンゲリオン……初号機専属パイロット。サードチルドレン碇シンジ……それが僕の公式の身分です。」

たった14歳の少年が背負った、重すぎる荷。

「母がエヴァに入った事で、僕はやがてエヴァで戦う事を決定づけられました。もちろん、そんな事は知らされていませんでしたけどね。そして僕は父にも捨てられました」
ソレを聞いたゲンドウの視線が厳しさを増す。

「父も悩んだと思います。ネルフを指揮する立場と父親としての立場。でも優先したのはネルフ総司令としての自分でした。」

いざと云う時に決断が鈍らないよう、父は僕との関係を断ち切った。エヴァの事は極秘でしたし、ネルフの事も公にはなっていませんでしたからね。そりゃ色々噂も立ちましたよ？

母が僕を父の元に置いて若い男と逃げたとか、父が母を捨てて僕も捨てたとか。母を殺して僕を捨てたなんてのもありましたね。

もちろん、エヴァの中の母にはそんな噂なんて聞こえませんが、父

は人類を救うので手一杯で、そんな噂に耳を傾ける事なんて無かった。でも……僕には聞いて来たし、耳にも入って来たんですよ。

ははは……一度僕の処遇を巡って親戚が集まった事がありました。6歳だったかな？そんな子供には分からないと思ったんでしょうね、面と向かって言われましたよ。

あんな夫婦の子供はロクな人間にならない。こんな子供、生まれて来なければ良かったのって……僕は要らない子供でした」

聞いている子供達の顔は青ざめていた。とても同じ年の男の子の話ではない。

この世界は平和で、世界のどこかで戦争は起こっているものの、それはテレビの向こうの話でしか無く、自分達とは無縁の話でしかない。

その無縁の筈の話を、目の前の少年は過去として語っている。

そして大人達の表情は苦渋に満ちていた。

全てが残酷で、全てが不条理だった。

子供を戦わせる？捨てる？人柱？生贄？6歳の子供に向かって愚かな事を口走った者達を一同に並べて糾弾したかった。

そして、その想像力を働かせ苦渋をのむ。自分達がその場に居たら？やはり同じ道を辿るのではないかと。

「あちこちたらい回しにされて、最後には施設に……でも施設での暮らしが僕には一番過ごしやすかった。

そしてある日、父から呼び出しの手紙がきました。第3新東京市への」

ゲンドウの視線は依然厳しい。異界の自分が息子を呼ぶ理由に思い当たる故に。

「……嬉しかったんです……もしかしたら父と暮らせるかもつて。

でも、そこで僕を待っていたのは戦場でした。

十数年の時を経て、使徒は再び人類の前に姿を現しました。

必死の防戦もむなしく使徒は侵攻を続けた。そこに僕は連れてこられた……僕はそのままエヴァに載せられ、使徒の前に放り出されました。

それから始まりました。僕の……エヴァのパイロットとしての、僕の人生が。

戦いましたよ。そうしないと人類が滅びる……なら戦うしか無いじゃ無いですか。

勝って当然、負ける事は人類の滅亡と同義の戦いを、僕達は戦い続けました」

その違和感に気付いたのは数名。

「？僕達？そうよ。さっき貴方、サイドCHILDレンって。それじゃあ貴方の他にも少なくとも二人、パイロットは居たの？」
ナオコの問いに、少年は天井を見詰めたまま答えた。

「……エヴァンゲリオン式号機専属パイロット。セカンドCHILDレンは……」
そしてその左目が一人を見つめた。

「惣流・アスカ・ラングレー……僕の世界の君だよ」

アスカは思わず隣のシンジの袖を握る。

「あ……アタシ？……うそ」

その驚愕は、等しくキョウコのモノでもあった。アスカがパイロットである事の意味を理解しているから。

「本当だよ。弐号機の中にはアスカのお母さんが入っていたから。アスカのお母さんも研究者で、エヴァの開発に関わっていた。そして、どこかの母子が担わなければイケない悲劇なら、そのシステムを生み出した者としてせめて自分が、と。

僕の母と同じく、自分を人柱に、そして娘を差し出したんだ。人類の未来の為に」

キョウコは少年が自分と会った事の無い訳が分かった。自分はその時、存在していなかったから。

「アスカはね、エヴァのパイロットである事に誇りを持ってた。綺麗で、元気で、頭もよくて。ケンスケはよくアスカの写真を学校の皆に売ってたよ。

たまにアスカにバレてお金を取られてたけど。

そして、僕とアスカは、ミサトさんの家で一緒に暮らしてたんだ……最後まで、ね」

シンジと一緒に暮らす。それはアスカにとっては一つの夢であったかも知れない。

でもそれは幸せの筈だ。戦争の為に母を犠牲にしても無い。今の幸せの延長にあって欲しい暮らしだ。

いつの間にか自分の肩に手を置いてくるキョウコに、アスカは無言で抱き付いた。

そんなアスカを無機質な目で見つめる少年に、ナオコは問う。

「サードが貴方、そしてセカンド……それじゃあ一人目は？ファーストは誰なの？それも子供？もしかしてこの中に」

室内の子供達に緊張が走った。

シンジとアスカの名前が挙がった。そして少年が自分達の事を知っている以上、ナオコの言葉には信憑性があった。

そして少年の瞳が動いた先で、体を強張らせた者が居た。

「・・・エヴァンゲリオン零号機専属パイロット。ファーストチルドレンは・・・綾波レイ。彼女が第一の適格者でした」

その言葉はいつも明るいレイの表情を凍らせるに十分だった。

意味するモノはシンジやアスカと同じ、母との決別。

レイは母親の事をとて愛している。

髪の色やアルビノ体質の所為でよく虐められていたレイに、いつも優しくぬくもりを与え続けてくれたかけがえのない大切な人。

たとえ別世界の話であっても、母にだけは捨てられたくは無かった。小刻みに震え出したレイを静かに見やり、ユイは彼女を抱き寄せた。すこしでも安心を与える様に

「では、零号機には綾波さんのお母さんが入っていたのね？」

確認をしたミサトに、帰って来たのは意外な答えだった。そして異常な答え。

「・・・いいえ。零号機には誰も入ってはいません」

「！！そんな！それじゃあ話が」

「綾波は人柱の介在無しにエヴァとシンク口出来る存在でした。彼女は僕達とは違いました」

「一体、それは」

「ファーストチルドレン綾波レイは・・・正確な意味での人間ではありませんでした」

それは驚愕を通り越していたかも知れない。

そして、それを聞いたレイの体の震えは止まっていた。が、その瞳は大きく開かれていた。

その瞳に危険を感じたユイやナオコはレイを部屋の外に連れ出そうとするが、少年の言葉が先んじた。

「違うよ。君じゃ無い。これは僕の世界の綾波レイの話。僕の知ってる綾波は君じゃ無い」

初めて見せた少年の優しい瞳。

もしかしたらこれがこの少年の本来の姿なのでは無いだろうか。

大人達がそう思う中、レイの瞳に理性が戻ってきたのを認識して、ゲンドウは先を促す。

「で？どういう意味かね」

「エヴァの操縦方法。その試行錯誤の段階で生まれた一つの試み。

エヴァとのシンク口の失敗が人とエヴァとの拒絶反応であるならば、エヴァが人ではなく使徒と認識すればシンク口も可能ではないかと考えた。

使徒リリースの細胞を元に作られたエヴァ。だったら操縦者にも同じ条件を付与する事で」

「まさか！」

「そうです。使徒リリースと人間の細胞から生み出された、使徒と人のハイブリッド。それが綾波レイでした。

数多の失敗を繰り返し、数多の肉体の生成に成功したものの、魂が宿り自我を持つ事が出来たのはたったの一人でした。ひとつの魂にたくさんの器。それが綾波」

「なんて傲慢な！命は生まれるものよ！造り出すモノじゃないわ！」

激昂するナオコの声にも、少年は淡々と言葉を返す事しかしない。

「その綾波の研究をしたのはリッコさんのお母さんだったと聞きま

す。多分、ナオコさん、ですよね？」

彼女は綾波を生み出し、自ら命を絶ちました。自分のした事に対す

る恐怖か絶望か、その真意は掴めないと、いつかりツコさんから聞ききました」

ナオコもまた沈黙する。自分が自殺したなどと聞かされれば無理も無い。

そして娘のリツコもその組織や戦いに関係している事に驚きを隠せない。

「僕達は……戦いました。綾波とアスカはウマが合わなかったのか、よく険悪なムードになってましたね。でも、戦いの時は3人で力を合わせて闘いました。終わりの見えない、僕達の戦いを」

少年の言葉から一つの推論が生まれる。

「ではエヴァは3体あって、パイロットは君達3人だけだったのか」ゲンドウの言葉にすぐ肯定の言葉が返ってくると思っていた一同に、さらなる衝撃が続く事になった。

「……ある日、アメリカで開発中のエヴァンゲリオン三号機の試験中に事故が発生して、ネルフ支部もろとも消滅する事態が発生しました。

そしてその事故を受けて、他で造られていた四号機の試験が日本で行われる事になった。

松代で行われた試験の、テストパイロットには……第四の適合者が……フォースチルドレンが選出される事になりました」

「……四人目」

「そう。そして、フォースには……鈴原トウジが選ばれた」
「わ、ワイが！ほならワイも人間や無かったんかい！それかオカン

がそのロボットに」

血色ばむトウジに対し、少年はあくまでも静かに語って聞かせる。

「違うよ。どっちも。四号機の実験にはダミープラグが試みられた。ソレは綾波の魂をデジタル化したモノをあらかじめ打ち込んで、人柱の代わりにするシステム。」

トウジは人間のままで、人柱の介在無しにエントリーする実験に加わっていた。でも………実験は失敗した」

「それは？」

「日本へ四号機を輸送中、使徒が四号機にとりつき侵食していました。ソレは実験の開始と同時に覚醒。」

松代の実験施設を吹き飛ばし、四号機は第3新東京市に向けて侵攻を開始した。そこにトウジを乗せたまま」

誰かが息を呑む音が大きく聞える。

「外部からのアクセスは全て断たれ、エントリープラグも射出出来ず。使徒を四号機から引き剥がす術もありませんでした。」

そしてネルフは決断した。四号機の破棄と使徒の殲滅。そして………フォースチルドレンの登録抹消。僕達は………使徒を迎撃した」

そしてついに、部屋に居た者達は少年の感情を読み取る事が出来た。それほどに、少年の雰囲気は、悲しみを帯びたモノになってきていた。

「……トウジは親友だった。戦いたくなんて無かった………でもアスカがやられて、綾波も突破されて。僕は負ける訳にはいかなかった。」

必死で戦って、なんとかやっと思徒を倒して………トウジは生きてた。嬉しかった。みんなも守って、トウジも守れたと思った。

でも・・・トウジは右足を失った・・・僕が、トウジの足を・・・奪った」

「それは違うわ！貴方は守ったのよ！その事実を見つめて、誇ればいいの！誰にも貴方を責める資格なんて無いんだ」あるんですよ「から？・・・なにを」

ミサトの言葉を遮った少年は、目をつむり唇を噛んでいた。

「あるんですよ。僕を責める資格がトウジには。

人柱を必要としない四号機の実験では特にパイロットが決められていた訳じゃ無い。ただ適合者の可能性のある者の中で、上位の者を選んだだけ。トウジには実験の参加を断る事が出来た。

でもトウジは参加する事を選んだ。それは、実験に参加する事でネルフに対して条件を提示する事が出来たから。

エヴァのパイロットを承諾する事への交換条件です。あの時点では世界の命運が掛かっていましたから、どれほど無茶な要求でもネルフの権限で通す事が出来たでしょう。

そしてトウジが求めた条件は、彼の妹を最新設備の整ったネルフの病院に移送する事。ただそれだけでした」

「妹？ナツミか！ナツミもおったんか！」

叫ぶトウジに、少年は眼を開け視線を送る。

「・・・トウジの妹さんはずっと入院していた。使徒との戦いの最中、誤ってシエルターの外に出て崩れたビルの下敷きになったんだ。命は取り留めたけど、中々完治する事が出来なかった。街は戦場でもあったから、医療機関も満足な処置は出来なかったから。

だからトウジは妹さんの為にエヴァに乗る事を選んだ。そして・・・
・・・ナツミちゃんが怪我をした時に使徒と闘っていたのは・・・
・・・僕でした」

この少年は、一体どれ程の苦難を背負えばいいのだろう。少年に掛

ける言葉を、見つけられる者は居なかった。

「トウジはそんな僕を許してくれて、友達になってくれて・・・でも僕は・・・妹さんに怪我を負わせ、トウジをネルフに巻き込んで。彼の右足まで奪って・・・トウジの人生を滅茶苦茶にした」

誰が悪いのかは分からない。

誰も悪くないのかも知れない。

だがその答えを出すには、自分達の口では軽すぎる。皆がソレを理解していた。

「・・・僕達は選ばれた人間でした。でも、ただ選ばれただけだった。全てを守るのには到底不足している力。でもその力しか持てない自分達・・・どれほど必死に足掻いても、僕らの手からは命がこぼれていった・・・それでも戦いは続いて。続いて・・・
・・・アスカが逝った」

既にアスカの顔色は青を通り越して白くなっている。
キョウコが居なければとつくに気絶しているだろう。

「使徒の精神攻撃を受けたアスカは、生きるという意思を失ったんだ。その前の使徒戦で重傷を負っていたのに、それでもみんなを守る為に戦ったアスカの心は・・・壊された。

生きる気力の無くなったアスカには怪我を治す気力も体力も無く、
どんどん衰弱していった・・・

アスカは最後に言ったんだ。シンジ、ごめんね、って。アスカが謝る事なんて何もないのに。

冷たくなったアスカを抱き上げた時、驚きましたよ。あんなに瑞々しくて、輝いていたアスカは・・・ウソみたいに軽かつ

た・・・あの頃の面影なんて全然なくて・・・
・・・軽かったなあ」

子供達の目には涙が見えている。それは悲しすぎる少年の物語だったから。

そして大人達は不安を拭えない。

なぜならその物語を語る本人の目には、一滴の涙も見ること出来なかったから。

「そして綾波も逝った・・・アスカがいなくなった後に現れた使徒は、エヴァに侵食してくるモノだった。

綾波は使徒につかまって、僕はそれを助けようとした。でも使徒が僕も取り込もうとした時、綾波は自分の力を内向きに展開して使徒を押しさえこんだ。

そしてそのまま・・・使徒と一緒に自爆した」

それはきつと覚悟の死だったろう。

それでも戦友を、もしかしたら好きだった男の子を守ろうとしたもう一人の自分を、レイは誇りに思った。

「綾波はあまり感情を表に出さない娘でした。彼女が笑ったところなんて、一回くらいしか見た事ないな。

そして自爆する直前に通信を繋いだ時、逃げる様に叫んだ僕に綾波は首を振った。でも彼女は泣いてた・・・そして、自分が生まれて初めて涙を流してる事に驚いて・・・僕に・・・私泣いてるって・・・彼女の笑顔を思い出せない。でも、泣き顔だけは・・・忘れられない」

「忘れる必要は無いのよ。覚えていてあげなさい。いつかその泣き顔が、笑顔に変わる日もくるから・・・きつと」

ミサトの、それは希望でしかない。でもそう信じたかった。

「みんな居なくなった。そして僕はただ一人のパイロットとして残された。もう、何もかもが嫌だった。

僕は……でも僕は死ぬわけにはいかなかった。僕はまだ戦わなければいけなかったから。もう、僕なんてどうなっても構わなかった。そんな、自分で自分の事がどうしようもなく嫌いな時に……僕はカヲル君と出会ったんだ」

そこでカヲルは少年と視線を交わす。

今まで、自分の名前が出てこなかった。ヒカリに話した中には自分も居た。カヲルはもう一人の自分に興味を持っていた。

「カヲル君はね、フィフスチルドレンとしてネルフにやって来た。パイロットの補充と云う形で。

歌が好きで、変わった口調でしゃべるんだ。僕にはよく分からない話をするんだけど、不快じゃなくて。

僕達は親友になった。

僕の嫌いな僕の事を、カヲル君は好きだと言ってくれた。自分は僕に逢う為に生れて来た。

僕もそうだった。カヲル君の事が好きで、カヲル君に逢う為に、生まれて来たような気がした……。でもそれは当然だったんだ。僕達の出会いは運命で必然。互いに同じモノを求めて、ソレを与えてくれるのは、やっぱり僕達二人でしかなくて。

フィフスチルドレン渚カヲルは……。裏死海文書が示した最後の使徒でした」

全ての者が息をのむ。そして思う。物語の終りが近い事を。

「セントラルドグマの最深部。ヘブンスゲートの奥深く、第二使徒

リリースの前で僕とカヲル君は対峙しました。

僕はカヲル君に生きて欲しかった。そして僕を殺して、僕の悪夢を終わらせて欲しかった。自分の命を自分で断って、人類を滅びに巻き込む勇気なんて僕には無かったから。戦いの中の死を、僕は望んでいた……でもカヲル君も同じだった。

カヲル君と僕にとって、生と死は等価値だった。そして互いに相手に生きて欲しいと願い、相手の未来を望んだ。だけど……カヲル君の後ろには誰も居なくて……僕の後ろには、大勢の人類が居て……僕はカヲル君を……殺した。

この手で握りつぶした。

エヴァを通して感触が伝わるんだ。親友を、好きだった人を握りつぶす感触が……今でもこの手に残ってる」

「だが、人類は救われたのだろう。それは誰かが成さねばならなかったのではないか？君は誇れる事をした。そう思いたまえ。そういう事が死んでいった者達への礼意だと私は思う」

ゲンドウの言葉に、少年の口が僅かに歪んだのが見えた。

「ふふ。そうですね？人類は救われました。使徒は全て退け、サードインパクトは阻止。人類は未来を勝ち取り……使徒を退けた……エヴァが残った」

子供には分からなかった。だが、大人は気が付く。

唾棄すべき可能性に。

「ちょっと……まさか」

「在る日突然ネルフは戦略自衛隊の奇襲を受けました。世界中から本部コンピュータへのハッキング。UN軍からの長距離爆雷。

ははは。可笑しいじゃないですか。使徒を退け人類をすくったネルフは……人類の敵になった」

予想していた答え。

予想だに出来なかつた子供達には信じられない。世界を救つた英雄は称えられる筈なのに。

「どうしてよ！あんだ世界を救つたんでしょ！それでなんで攻撃されんのよー！」

アスカの叫びに、少年は静かに視線を返す。

「使徒を倒す程の兵器が存在する。それは一つの脅威だよ？」

エヴァ、そしてエヴァを操縦する僕は人類の脅威でしかないのさ。

エヴァに関わる者は全てね。だから侵攻が始まった。

降伏も投降も許されない。皆殺しが絶対命令の掃討戦。

相手は戦闘のプロだからね。僕達に勝てる見込みなんて初めから無かつた。エヴァはまっさきに抑えられて僕はエヴァに乗る事も出来ない。

父さんもミサトさんもリツコさんも、マヤさんや冬月副司令も、みんな死んでしまった……

ふふ。可笑しいでしょ？この傷、全部人間に付けられたんだよ？撃たれて焼かれて斬られて……僕を殺そうと襲つて来たのは、僕が守ろうとした人達なんだ。

ははは……こんな可笑しい事は無いじゃないか。心が壊れるまで戦つて、涙の意味を知る事も無く戦い続けて、全てを失つても尚戦い続けた先に、待っていたのはただの虐殺なんだ……
・こんなに可笑しい話は無い……」

当たつて欲しくは無かつた予感。そして悟る。

この少年の涙など……すでに枯れてしまった事に。

「地獄の様な本部を何とか抜けて、僕が本部の外に出てみると、もう一面敵だらけだったよ。」

壮観だったよ？僕の手にはミサトさんの形見の拳銃一丁で、もう立ってるのも不思議な位だったけど。

彼等は一斉に構えるんだ。

僕は十分生きたと思った。足掻いて、もがいた。だから、最後は笑って死にたかった。そして僕が敵に向かって駆け出した時、彼らは僕に一斉に攻撃を開始して……爆炎と硝煙の中で僕は意識を失いました。気が付いたらココに……これが、僕の知る、全ての事です」

そして少年の物語は終わった。

病室の静けさが、その凄まじさを物語るのみだった。

安易に受け入れる事の出来ない話。だが逆に、どれか一つでも嘘が入れば、全てが綻んでしまうかの様な話。

自分達が知りたかった異世界の話は、こんな話では無かった筈だ。だがこんな話だからこそ、今の少年の体は、説明のつくモノだった。誰一人言葉を発しない病室で、少年はゲンドウに視線を向ける。

「約束でしたよね。僕は僕の世界の話を貴方達にしました。僕の世界じゃ結構トップシークレットなんですよ？

僕は約束を果たしました。次は貴方です……僕の願いを叶えて下さい」

「……君の望みは、なんだ？」

その時、部屋に居た者達は見た。少年の瞳から光が消えた事に。そして聞く

「簡単な事ですよ。僕を……殺して下さい」

3話（前書き）

今話は有名な映画のシーンを引用させて貰ってます。（勝手にですがw）

僕が好きだ。というだけの理由の様な物です。不快感をもたれたら申し訳有りません。

3話

自分を殺して下さい。

静かに、だが確固たる意志を感じさせ、少年は言った。

そして何故か、皆それを当然の言葉の様に感じていた。それ程の地獄が、彼の後ろには在った。

あるいは予想の範疇だったのだろう。ゲンドウは微動だにせず、その言葉を受け止めた。

「それは出来ない……君は死んでは為らないと、私は思う」

ゲンドウは強い意志を込めて、少年の目を見据え彼の言葉を拒絶する。

これ以上、この少年は苦しむべきでは無いと強く思う。

「……やっぱり……また僕を裏切るんですね。いいですよ。信用出来るなんて思っていますでしたから」

少年は驚いてはいなかった。それは予想通りとでも言わんばかりに、なんの動揺も見せてはいない。

「違うよ!!」

濁った左目が向いた先には、この世界の自分が居た。

その深い瞳は涙に濡れ、それでもまっすぐに自分を見つめていた。

「父さんは君を裏切ったんじゃない。君に、生きて欲しいんだ！生きて、せめてこれから先、幸せになつて欲しいんだ！……だつて君は！君だつて僕じゃないか!!」

今聞かされた自分の物語。

自分じゃ無い。違う自分の物語。

どうして彼だったんだろう？

同じ碇シンジなのに、どうして彼にはそんな苦しみしか無く、自分はたかさんの幸せの中に居て。

彼は自分じゃ無い。でも、彼は自分だったかも知れない。

シンジはただ悔しくて、怖くて、悲しかった。

部屋に居る者達は二人のシンジをただ見つめていた。

運命に翻弄され続け、現実には傷つけられ続けた碇シンジ。

家族や友人に囲まれ、温かく優しく育った碇シンジ。

誰かの為に必死で泣き叫ぶ事の出来るシンジを、皆が誇りに感じていた。

そして、少年の目に光が宿る。

「・・・ありがとう」

「えっ？」

「ありがとう・・・この世界の僕にとって、ココは優しい場所なんだね。ありがとう。優しい僕で居てくれて。本当にありがとう」

「君は・・・君だって優しいじゃないか・・・」

自分が彼であったなら、きっと【ありがとう】なんて言えない。シンジはそう思った。

彼はきつと誰よりも優しいと、そして、強いと。

「それに君だけじゃ無い。きつとみんな、僕の為に泣いてくれるんだよね？同情かもしれない。憐れみかも知れない・・・でもそれは優しさだと、僕は思いたい。」

僕にとっての大人はただ怖い存在でしか無かった。僕を戦場に送り

出すだけの人達。僕が逃げる事を許さない人達……でもココは違うんだね？君達を見てれば分かる。

ココは本当に優しい世界。君達にとっては天国では無いのかも知れないけど、忘れないで？本当に幸せな事って、その中に居ると意外と見えないモノなんだよ？」

彼の言葉は慈愛に満ちていた。

とても14歳の少年の言葉では無い。だが、その人生もまた14歳の少年のモノでは無かったのであれば、その言葉には過ぎる重みが含まれていた。

この少年は優し過ぎる。

彼の地獄を生きるには、彼は優し過ぎた。誰もがそう思わずには居られなかった。

「どうしてこんな事になったのかは分からない。でも僕は、君に……君達に会えて嬉しかったよ。

でもね？一つ、違うよ？」

何が？と思う。

「確かに、僕の世界は僕にとって地獄だった。でもソレだけじゃ無い。

短い、とても短い間だったけど、アスカや綾波と過ごした日々は、僕にとって宝石みたいに輝いていた。

ミサトさんやネルフの皆と必死に戦って……勝った後の宴会はそりゃあ盛り上がったんだよ？

父さんや母さんが僕を捨ててでも世界を救おうとした事を僕は誇りに思う。

君になりたかったか？と聞かれれば、ノーとは言えない……でも、やっぱり僕は僕でしかないし、僕でいいんだと思う。

僕はね？幸せでは無かった……でも、僕は僕の人生を精一杯生きた。

僕はね・・・生きたよ。ありがとう、もう一人の僕・・・・・・・・幸せになってくれて、本当にありがとう」

少年は静かに瞼を閉じた。

傷付き疲れ果てた少年の、それでも失われぬ優しさを見た者達は、ただ黙ってその姿を見るだけだった。

でもソレはもう始まっていた。
始まってしまった。

「・・・・・・・・ツホ！ゴホツ！ゴホツ！！」

突然少年が咳き込み出した。

まだ重傷には違いない。少し無理をさせ過ぎたのかも知れない。

一同に不安がよぎる中、ナオコは医師としての精神力を発揮し刹那に少年の元へ駆け寄った。

「退いて！！」

ベットの傍に居たミサトとゲンドウを押し退けて、ナオコは少年の顔を覗き込んだ。症状を見、治療を施す為に。

その時を待っている者が居るとは思わずに。

「大丈夫！？！」

「止せ！！！！」

叫んだのはゲンドウだった。

それはゲンドウの勘。

何かが勘に触った。そして背筋を貫く悪寒に集中力を研ぎ澄ます。そして気付く。

ナオコが駆け寄る少年の・・・・・・・・僅かに開いた左目が光を放っている事に。

それは一瞬だった。

ゲンドウの声が響いた時、すでにナオコの左胸に少年の右腕が伸びていた。

本来なら動かせる筈も無い腕。だが少年は気力で四肢を動かす術を持っていた。戦場で生き抜くために。

彼が欲したモノはナオコの胸ポケットにささるボールペン。それを素早く奪いナオコを突き飛ばす。

そして逡巡する事無く

自分の首にペンを突き刺した。

誰かが悲鳴を上げる間もない。彼の首にはボールペンが突き刺さっていた・・・僅かに浅く。

「な　　ぜ？」

少年の手首を、がっちり握るゲンドウが居た。

「それはならないと・・・言った筈だ」

それはギリギリの奇跡だった。そしてその奇跡が、ゲンドウをしても油断を呼ぶ。

にやり

それは歪んだ笑みだった。

少年が見せた笑みに、ゲンドウが握った腕を引き剥がそうと力を入れた刹那、少年は自らの首を大きく仰け反らせた。

彼の首からは、大量の血が噴き出す事になった。

「ひっ！」

「きゃーーーーー！！！」

子供達の悲鳴が聞こえる中

「いけない！」「しまった！」

大人達はすぐさま少年の血を止めようと動いた。

その為、ゲンドウの手は少年の右手から離れてしまう。その間隙、再び動かない筈の身体は驚異の動きを見せた。

少年はベットから身を転げ皆とは反対側に逃れ、辛うじて動く右手で思い切りガラスを割り砕いた。

「！！つやめなさい！」

ミサトは射殺さんとはばかりの視線で少年の動きを辛うじて止める。

少年の右手には割れたガラスが握られていた。

その手からは血が滴り、首からの出血も止まる様子は無い。ココに至り事態は膠着してしまった。

少年はガラスで自らを貫こうと何うが、周囲を牽制しているこの手を引いたらゲンドウやミサトが襲い掛かってくる事をヒシヒシと感じていた。

そして今の自分にはその動きに勝る動きで、自らの目的を果す力は無いと理解出来た。

だが大人達もまた動けない。

今掛かれば彼の刃に自らが襲われるだろう。だがそれよりも不味いのはこちらに隙が出来てしまう事だ。

もし取り押さえるのに失敗したら今度こそ間違いなく彼は死ぬだろう

う。

彼の持つガラスはそれほど大きく、鋭利だ。

そして時間も残されては居ない。

只でさえ重症なのだ。その上、首からの出血は浅いとは言っても場所が悪い。充分危険な状態な事に変わりはない。

そんな誰一人動く事が叶わぬ状況で、一人足を踏み出す者が居た。

「……もう、やめなさい」

碇ユイだった。

何処かに居た息子。

自分では無い自分が……愛して捨てた、自分の息子。

自分は彼に何もして上げられ無かった事を知った。

其処に居なかつた自分に出来る事など有る筈も無い。でも今は？

自分の前に彼は居て、彼の前に自分は居るのだ。

ユイは確信していた。

自分が彼の為に、出来ない事など何も無いと。

「もう終わったのよ」

「………ってない」

ユイの言葉に少年は視線を落とす

「貴方の戦いは……もう終わったの。終わっ！痛」

ユイがその手に触れるほど近付いた時、少年は思わず手を動かしてしまい、ユイの手から血が滴り落ちた。

「ユイ！」「母さん！」

ゲンドウとシンジの言葉に振り向きもせず、ユイはただ少年を見詰める。

「ね？もう終わったのよ」

その表情は至極穏やかなモノだった。とても安らぐ、そんな表情をユイは少年に向け続ける。

「貴方の戦いはもう終わったのよ」

「終わってなん「終わったの!」・・・」

最後までは言わせない。言い含めるように力強く。

「もう終わったのよ!」「終わってなんか無い!」「どうし」「終わってなんか無いんだ!」・・・」

視線を上げた少年の顔には怒りがあつた。

全てを諦めた目をしていた。

慈愛に満ちた目をしていた。

そんな少年が見せた・・・怒りの顔。

「僕の戦いなんかじゃない!戦いの中に連れて来られただけだ!守れって言われて!皆の為に戦かわされただけだ!」

逃げ出したいのを我慢して怖い思いを押さえ込んで、何とかやっと生き残って。

戦いが終わった後にコンビニに拠ると皆が話してるんだ!

この街も危なくなつたとかもつと上手く戦えないのかとか言いたい放題!!

だったら自分が戦えば良いじゃないか!」

聞く者は知つた。

コレは怒りじゃない。コレは・・・嘆きだ。

「きつと皆怖かつたのよ。無知な事は罪かもしれない。でも悪ではないのよ?」

ユイはそれでも話し掛ける。

今ココで、この少年の嘆きに巻き込まれてはいけなさと感じるから

「ミサトさんは僕が守った街だって言った。人に誉められる事をしたって。でもその街に僕の居場所なんて無かった。そこにはみんなの家族が居て友達が居て好きな人達が居て！でも僕の大事な人は皆死んで！もう僕を知る人だって一人も居ないんだ！」

ガシャアアン！と動かない筈の左腕はガラスに打ち付けられる。誰も声を発する事の出来ない中で少年は独りうづくまる。

「……みんな……居ない。居ないんだ」

「ココに居るわ……私達がココに居る」

そう言い聞かせたかった。そう分からせたかった。

「……青葉さんって人が居たんです。オペレーターで、僕と一緒に、襲われたネルフの中を戦ったんだ」

それは皆も知る人物

「そう。彼も居るのよ。アタシの同僚、教師よ」

少年は顔を上げない

「そうなんだ……青葉さんはギターが好きで、よくギターを弾いて聞かせてくれた」

「ふふ。変わんないわ。こっちの彼もそう」

ミサトは少し少年と近付いたと思った。そして、思ったただけだと知らされた。

「よく青葉さん言っていました。いつか使徒との戦いが終わったら、またバンドやるんだって。

ネルフに入る前に学生時代にバンドやってて、俺達のバンドは最高なんだぞって。ボーカルの娘はすごい才能あるんだって・・・楽しそうに、言っていました。

戦自の侵攻の中で偶然に青葉さんに合流して、僕達はなんとか戦っていて・・・走ってる時に微かに動いてる味方を見つけたんです。

僕はもう手遅れだから先に進もうって言ったのに、青葉さんはほっとけないって言って駆け寄って。

僕はそんな2人を背に後ろを警戒していたら、僕の背後から爆風がやって来て！

・・・

倒れてる人に手榴弾が付けられていて、青葉さんが抱き起こした時にピンが外れて吹き飛ばしたんです。

あ、青葉さんの血や肉片が飛び散って僕の身体にべっとり付いて・・・

・青葉さんだったのに!!」

不思議だった。

見た事も無い惨状が、一同の目に映ったかのようにだった。

「助けようとしたんだ！僕だって助けようとしたんだよ！！でもダメなんだ！いい、一生懸命手で抑えてるのにどんどん内臓が出てくるんだ！どうにも出来ないじゃないか！

ど、どうに、青葉さんが言うんだ！死にたくないよ！って！死に・・・
・生きたいよ！って！！生きて！！もう一度バンド・・・
青葉さんが、言うんだ・・・でも・・・
・・・

青葉さ

んの右手が

見つか
らないんだ」

少年の居た世界は地獄だと思った。思ってた。
でもきつとそこには、自分達が考える以上の地獄が在った。

「一生懸命探したのに……青葉さん、言っても手伝ってく
れな……探したのに……どうしても見つからないんだ。
どうしても 見つか「も……う……いい……
もういい……もういい」……」

ユイは少年を抱きしめて言葉を遮る。
血まみれの少年を、ただ力一杯抱きしめて言葉を遮る。

「……う……う……う……
「もういい……もういい!!」

自らの、その涙の理由は分からなかった。悲しみなのか哀れみなの
か。

自らの、その身体の震えは分からなかった。恐怖なのか怒りなのか。
でもユイにはもう充分だった。
たった一つの答えがココにあれば、それだけでもう良かった。

「……お帰りなさい……お帰りなさい」
「う……う……う……う……う……う……」

「お帰りなさい………シンジ」

少年は、ようやく涙を取り戻したのだった。

3話（後書き）

遅筆で申し訳有りません。
まだ、続きますのでヨロシクデス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0129/>

碓シンジ補完計画 子供達に福音を

2010年10月9日05時21分発行